

名誉館長講話実施報告抄

新野直吉*

天野芳太郎・佐藤 章・和崎 ハル・斎藤 憲三・小杉 天外・小場 恒吉

はじめに

平成15年度は、「先覚記念室」と「菅江真澄資料センター」に係る館話を、昨年同様展示リニューアルに伴う変更によって、ジョイナスを会場とする講話として12回行った。その中から先覚の5月9日(金)天野芳太郎・30日(金)佐藤章・6月6日(金)和崎ハル・20日(金)斎藤憲三・27日(金)小杉天外・7月18日(金)小場恒吉についての話を文章化して報告する。

天野芳太郎

明治31年(1898)1月2日、南秋田郡脇本村脇本に明治10年生まれ之父吉治と12年生まれ之母ナラの長男として誕生。34年には妹タケが生まれる。37年(1904)4月1日脇本尋常小学校に入学、土木建築の請負業の父の仕事の都合で函館に転校し、脇本小学校の資料では1年生の成績は空欄になっているという。38年6月脇本小に戻り、2年・3年の成績は8点評価の音楽以外の教科は皆10点で、操行は甲、記録から見て天性優れた少年であった。40年6月また北海道函館区住吉尋常小学校に転校、41年3月4年卒業したが、学校制度が変り42年3月第5学年を修了、さらに、秋田市で祖母ハルと下宿生活をしながら、明治43年(1910)3月秋田市中通小学校を卒業、高等小学校に進んで45年卒業。

彼は43年に函館で4000年前のといわれる黒曜石の石槍を拾った。これで考古学に開眼したのか、生来の素質に火がついたのか、翌44年南秋田郡寺内村将軍野で石鏃を、男鹿では石斧を採取した。

大正2年(1913)4月秋田工業学校に入学した。専攻は機械科で5年3月に10期生として卒業すると、既に神奈川県鶴見町に転居していた父のもとに移り住む。後の横浜市鶴見区生麦町に当たる。横浜高等工業(或は蔵前高等工業)に学んだと伝

える物もあるが、定かではない。造船所に勤めたり鋳物工場を経営したりしたという。鶴見では3歳下の妹タケが、「天野屋本店」という「子育て饅頭」の店を営み業績を挙げていたという。大正8年(1919)2月40歳で母が逝去し、翌年父は26歳の国馬マサと結婚したという。10年頃天野式ポンプの実用新案の登録をし、また自動車エンジン利用の船舶用発動機も製作したというから発明家でもあったわけである。ただ大阪では12年頃手動の消防ポンプを発表したが、あまり芳しい成果はなかったらしく、しかも12年春チフスに罹ったうえに、9月1日の関東大震災では父が重傷を負い入院したから、すべて順風満帆とは行かなかったのであろう。

13年(1924)横浜市で妹の夫荻原易次郎と共に饅頭屋の支店を開き然るべき業績だったらしいが、店は人任せで義弟と四国や東北・北海道の旅行を楽しんだり、支店二階の貿易会社でのち井川になる末富よしと知り合ったりし、自分は海外雄飛を目指しその画策に没頭していたという。その状況下、9月数え年27歳で荒井すず江21歳と結婚する。ちょうど適齢だったのであろう。

大正15年10月に申請していた「子育て饅頭」の商標が昭和2年に登録され、普通ならこれで生活安定が求められることになるわけであるが、この人は違っていた。昭和3年(1928)4月宿年の希望を達成すべく南米を目指して移住するのである。しかも平坦な道筋で出発するのではなかった。移住に反対する妻とは離婚し、大正14年8月生まれの子長女玻満子、昭和2年2月生まれの子次女諒子は知人に預けて、4月27日横浜を出帆した博多丸でシンガポール・アフリカ経由南米ウルグアイに移住した。7月10日モンテビデオに着く。8月8日中米コスタリカに移動し、首都サン・ホセで小学校に入学。

*秋田県立博物館 Akita Prefectural Museum

ところが日本では、8月10日父吉治が53歳で逝去し訃報に接した彼は9月27日リオ・デ・ジャネイロを出帆アフリカ経由で帰国した。10月からの諸処理を済ませると、勿論留まることはなく、12月31日横浜を出帆した銀洋丸で太平洋を航海、昭和4年1月12日ハワイから26日ロサンゼルスに着き、北米経由2月8日パナマのバルボアに着いた。コロムビアから外国船で南米に戻ったが、今度着いたのはヴェネズエラであった。2月26日はラ・グアイラに上陸し翌日カラカスに到着した。

和歌山県出身山本芳松と日本雑貨の輸入業を始めたが、山本の帰国などでパナマに移動し、横浜で相知った島根県出身の末富（離婚して井川）よしを待つことにした。8月4日店員を求めてペルーのリマに末富商会藤井忠三を訪ねたりして準備、11月13日パナマ市アベニダ・セントラル47番地に居宅兼店舗を構え、井川よしと亀井某とを店員にした。12月12日天野商会（カーサ・ハポネサ）という百貨店を開き、昭和6年4月1日には支店も開き事業は軌道に乗った。

昭和7年(1932)1月末に要塞の撮影を咎められ米国の軍隊にカメラを没収されるトラブルもあったが、4月に藤井忠三来訪し滞在1週間、7月には彼がリマの忠三を訪ねその長女藤井テレサ志津子と婚約するという慶事もあった。彼女は18歳で彼は35歳であった。忠三は広島県出身で娘の母はパナマ人であった。12月末頃には志津子を伴い帰国の途に就き、8年1月4年ぶりに日本の土を踏んだ。伊勢神宮で結婚式を挙げたという。

また横浜の公園墓地に分骨して天野家の墓を建てた。横浜に拠点を置く姿勢を明確にしたことも注目される。現に鶴見区生麦に戸籍を移していたのである。横浜市中区元浜町に同志井川よしを社長とする井川商店も設立した。

8月上旬には故郷脇本に帰り、妻も初めて脇本を訪れた。天野家の墓は善法寺にあり、分骨式に参列してくれた人全員にと、豪華な菓子折200箇を用意した。幼友達で畳工場を営んでいた高桑丹治郎には分骨の諸経費に「百円札」1枚を託した。それにはエピソードも伝わる。当時地元の店で百円紙幣を使うには大きすぎた。或る大地主の処で「十円札」10枚に替えて貰い、やっ

と実用に供されたという。愛郷崇仏の念篤い彼は分骨後も毎年盆には20円～30円の布施を昭和25年迄送り続けた（『南米のシュリーマン天野芳太郎』）という。なおこの時はその後日本各地を旅行して9月パナマへの帰路に就いた。

昭和9年(1934)1月31日長男直人が生まれた。10年1月20日妻子と共にペルーへの旅に出帆、28日リマ市藤井忠三宅に到り滞在する。3月28日から忠三も加わり約1ヵ月のチリ旅行を行う。11月2日新事業を起こすべくチリに赴き、半年程滞在した。彼が目標とした「一国一事業」としてアンダリエン農場をチリに開くためである。

パナマでは天野商会、コスタリカで東太平洋漁業会社、エクアドルで天野製菓、ペルーで金融・投資業、そしてチリではこの農場である。この広範な事業で数百万ドルの巨富を得ることになる。

考古学者としての天野にとっても昭和10年は画期的な年であった。インカ帝国の遺跡マチュ・ピチュに初登頂したからである。少年時代から考古学に目覚めていた彼は、北米から南米まで巡る間に独乙のハインリッヒ・シュリーマンの自叙伝『古代への情熱』で学問研究の理念を得ていた。プレスペイン研究に邁進するようになる。シュリーマンはロシアに移住し、印度産の藍の大商人になり、慶応元年(1865)日本にも立ち寄るような世界旅行をした。彼は『ホメロス』にあるトロイについてその実在を信じ、アテネで『ホメロス』の詩に通じた才女ソフィアと結婚した。情熱を燃やして追究し、ついにトロイの発見者となったのである。

彼は正しくこのマチュ・ピチュという山岳都市遺跡を踏破して、蒙古斑点を持ち彼も親近感をいだいていたに違いないインディオといわれる人々が、スペイン侵入以前に有していた高い文化の神秘を体感したのであろう。数千点にのぼる収集資料を自宅二階に陳列公開するのである。

昭和11年(1936)6月パナマを発ち日本に帰り、漁船発注などの仕事をして戻った。事業は一層充実した筈である。だが昭和10年日本の国際関係は緊張し独・伊との接近によってアジア大陸に進出する国策は、日米関係を悪化させた。危険感もあったであろう昭和15年(1940)4月、家族と共に

帰国した。しかし「紀元二千六百年記念叙勲」は受けることを承知しないで単身ロサンゼルス経由パナマに戻った。思うに国際人としての判断があつて断つたのであろう。12月10日『中南米の横顔』（朝日新聞社）を出版した。

昭和16年(1941)日米開戦しパナマで逮捕され、大収集品も数千冊の蔵書も勿論財産も、皆没収の上チヨリヨス監房を経てバルボアの強制収容所で116日間のテント生活を体験した。17年45歳になった彼は4月米国に送られ、5月・6月と転々と16日ニューヨーク着18日第1次交換船で出帆、リオ・デ・ジャネイロ経由、7月20日ロレンソマルケス着、22日日本からの交換船コンテ・ベルデ号が到着したのに乗り継ぎ、印度洋から昭南島を通り8月19日横浜港着、翌日葉ッ葉服に頭陀袋一つで横浜市本牧の留守宅に帰着した。

陸海軍の誘いは受けずに、抑留者帰還運動を行い、各地で講演を行い、海外放送にも出演。18年(1943)には1月から講演旅行に出て、四国・九州から朝鮮半島に至り、九州各地で講演し27日横浜に戻った。30日『パナマ及びパナマ運河』（朝日新聞社）を刊行。2月に山陽・東海、3月東北・北海道と講演旅行、5月19日には日秘協会で「南米の古代文化に就いて」の講演（帝国ホテル）をした。ペルーが漢字表記「秘露」である。

6月15日から60日間上海をはじめ、中国各地の経済調査旅行を外務省の委嘱で行った。そして6月30日付で外務省嘱託を命ぜられている。軍部よりも外務省を選択した訳である。6月20日『我が囚はれの記』（汎洋社）を刊行した。彼は、数え年47歳で昭和19年(1944)を迎えた。4月下旬は伊豆の温泉で静養もした。ところがこの年8月11日に30歳の妻志津子が死去したのである。10月19日藤沢市鶴沼に転居する。

20年8月15日終戦。9月15日頃北海道根室に至る。千島全島支配を宣言したソ聯の動きを意識してのことであろうか。また11月2日頃には近衛文麿を世田谷の萩外荘を訪ねた。彼が関与した漁船で近衛を脱出させる計画もあったというが、12月16日には近衛は自殺する。

昭和21年(1946)数え年49歳の彼は、長崎県諫早に南米村の計画を樹てたりし、翌年には『遙か

なる国々』（日本ブッククラブ）を刊行する。進駐軍に対し「スプルーシショー（東日芸能社）」を結成して基地巡廻の興業を始めるような、抑えることのできない対外志向の行動も見せた。南米に帰航の計画も視界に入ることになる。

23年には7日脇本に帰郷した。その頃、アンデス山地の中に《秋田県出身・天野芳太郎》と彫った塚を築いてある旨を、語っていた由である。8月には『中南米の表情』（講談社）を出し、10月12日にはパナマのヒメネス大統領から日本の友人彼に招待状が出されたという新聞記事（読売）が出たりする。25年7月にも『これを富者というー南米の金持ー』（「金曜」）を執筆。10月縦横斜各100行の「魔法陣」を完成する異能も発揮したが、いよいよ昭和26年(1951)南米帰航を実行する。

2月14日瑞典貨物船クリスター・サーレン号で横浜出航、猛吹雪で犬吠崎沖で遭難し13時間漂流の後に米国船に救助され横浜に還った。3月13日霞ヶ関で「日本ペルー協会」の送別会を受け、23日川崎汽船聖川丸で清水港出帆カナダのバンクーバー上陸。空路ジャマイカ経由パナマに到着し、旧知と再会の後にペルーに至る。4月16日リマに到着し、25日在留邦人有志の歓迎会を受け、6月5日星学園校庭で2000人の聴衆に講演をする。

インカフィッシングという漁業会社を設立し、金融業も開設する。さらにエクアドル・チリー・コスタリカ・パナマ各国に事業を展開して、業務と資産の挽回に努力する。

27年(1952)古代アンデス文明研究に拍車をかけ、両親が岐阜県出身で昭和初年に移住した日系人渡辺美代子を研究助手とした。28年にはチャンカイ発掘にも着手する。29年(1954)夏リマに新築した自宅に、私設の博物館を設置した。11月10日渡辺美代子26歳と結婚し、帰国して伊勢神宮に参詣した。翌30年(1955)5月「リマ養鶏組合」を設立し、11月『卵は奇蹟を生む』という本を出したという。

昭和31年ブラジル移民調査の帰途ペルーに立寄った東京大学泉靖一夫妻の訪問を受け数カ月に亘る調査研究の案内を続け援助をし、8月来訪の渋沢敬三中南米移動大使に泉と共に会見、アンデス発掘援助を約し、リマ北西130キロのチャンカイ

溪谷発掘を行い日本的なものに通ずる遺物を発見。

33年1月私立の「天野博物館」を発足させた。5月には新宿伊勢丹デパートで「インカ帝国文化展」を初めて開き、彼自身もそれに先立って帰国し、続いて大阪・名古屋・福岡・横浜で開催された展示に随行した。この年6月出発した第一次東京大学アンデス地帯学術調査団が、文化人類学者石田英一郎を団長に3カ月に亘ってペルー全域を調査し、彼もその一段階に同行した。翌年9月長女のまりゑ22歳を失ったが、ペルー共和国の政府から文化功労勲章を授けられた。35年6月泉靖一団長の第二次東京大学アンデス調査団が成果を挙げ、昭和36年(1961)4月「インカ黄金展」のために、これが最後になる帰国をする。

昭和39年(1964)、前年4月からリマ市レテイロ街に着工していた、鉄筋三階建の天野博物館(ムセオ・アマノ)が5月に竣工し、チャンカイ文物2万3000点を含む10万点収蔵で8月開館、無料公開した。42年には、皇太子御夫妻が来館され、パチャカマ遺跡の御案内もする。44年10月72歳脳血栓で倒れたが、第五次東京大学調査団の村井隊員らの治療を受けることができた。一方45年(1970)11月には泉団長が東京で55歳で急逝した。

49年(1974)6月「関西学院大学の亀田隆之リマ訪問」という年譜記事が9日付で見られるが、亀田氏は若い頃から交際のあった古代史学者なので、読んで然るべき感懐を得た。50年には「インカ帝国とミイラ展」を小田急百貨店で開き、翌年暮から52年1月までエクアドルへ1万キロのジープ旅をし、53年「インカ帝国三千年展」を東京で開き、55年には吉川英治文化賞を受けた。

昭和57年(1982)10月1日、日本と中南米の文化交流に尽くした功績により国際交流基金賞を受けたが、14日自宅で85歳の生涯を閉じる。

平成4年(1992)10月14日、生地近くの脇本公民館敷地内に、高さ90cm・幅2m・奥行20cmのアフリカ黒御影にチャンカイ谷の石を挿入し、「天野芳太郎生誕の地」と日本語とスペイン語で書かれた顕彰碑が建立された。

佐藤章

秋田が生んだ日本民間飛行士の先駆者佐藤章は、明治27年(1894)10月28日仙北郡金沢西根村字下萩沢に祖父金重の養子平治と金重の娘富子との4男に生まれ、祖父は孫に要蔵と命名した。佐藤家は地主で金重は苗字帯刀を許され、父の実家佐藤長左衛門も菅江真澄遊覧記にも出て来る旧家である。その祖父も父も村長や村会議員を務め、明治16年から昭和13年までの日記を、昭和17年1月に著名な新聞記者赤川菊村(源一郎)が編んだ『萩沢歳時記』は、柳田国男が114枚もの長文の序を寄せた程の民俗学上の名著述である。

鳥人の彼に因って言えば、二宮忠八が明治24年鳥型飛行器(ゴム動力)を飛ばしてから3年後で、忠八が玉虫型乗人模型を作った翌年の生まれである。ダビンチが1500年頃にオーニソプター(羽搏き機)の絵を描いたという時代から人は空に憧れたが、ライト兄弟がプロペラ・エンジン機で飛んだ1903年は明治36年で要蔵の小学生時代のことである。小学校4年までは2軒の道を小柄な体で村の学校に通い、高等小学校は隣町角間川まで4軒余の道を深い積雪の冬の日も通い、迎えに出た兄たちから歌う元気な声はすれど姿は見えないので雲雀のニックネームを付けられた。「在郷ッペ」とからかったいわゆるガキ大将を相撲で負かし彼が代わってその地位を克ち取ったという。相手こそは仙北地方の大地主高梨村の池田家の息子文一郎で、後年「アキラ会」の会長になるまでの親交を結ぶことになる。長じて自ら「章」を名乗る。

この頃押川春浪の『海底軍艦』(明治33年刊)など愛国的冒険小説を愛読した。甲より乙が多い成績だったという教師談も伝わっている。41年(1908)4月横手中学校に入学。43年日野熊蔵大尉機と徳川好敏大尉機が日本で初めて飛行に成功した。日野機は2mの高度で70mとか100mとかという飛行であった。中学1年では金沢の知人渡辺家に寄寓し、のち寄宿舎に入ったという。陸軍幼年学校に入学を志したらしいともいう。洋傘を開いて二階から飛び降りたとか、上級生に閉じ込められた二階の室から襖を背中に括りつけて飛び降り脱出したとかいう逸話も残すが、黙々と模型飛行機を造ったり、機械体操を得意にしたり、逆立

歩行が得意で寄宿舎から100mもの距離を本を口に銜えて移動したうえ、階段を昇って教室に入ったという信じ難いような伝えもある。

明治末から大正初めには外国飛行士の来日興行もよくあり、前の年8月5日「日本飛行協会」も設立された大正2年(1903)3月、中学校を卒業した。3月28日には木村鈴四郎・徳田金一郎両中尉が機の分解で日本軍における航空殉職第1号になった。暫し家事を手伝ったともいうが、上京して正則英語学校を経て早稲田大学理工学部に入學する。押川春浪が早稲田出身であったことに関係があるかもしれない。春浪は本名方存(まさより)で、父方義は四国松山出身東北学院創設者である。

大正4年(1915)3月26日兵庫県鳴尾の東洋飛行学校に入校した。この学校は、前年の3年6月の第1回民間飛行競技会に、滞空時間31分22秒で優勝した坂本寿一が設立した学校で、坂本はこの年米国の工場から帰国し、5月和歌山で坂本式複葉トラクターという牽引式の飛行機で飛行会を行ったのち、この競技会に出たのである。高度優勝は2003mの荻田常三郎であった。

4年3月2日「遺言状を認めた。老いたる父母は案ぜられるが、前世からの宿業だから致し方ない」と日記に書いたという状況で、15日博多に坂本を訪ねた。伝家の貞宗の短刀で右手小指を切り血書した嘆願書と受験届を行違になった坂本に送り、自らも大阪に向い入學を許されたのである。

1000円も納金したのに坂本は不誠実な人物で授業もせず遊興に耽っていた。6月遂に直接談判をし「色と酒との坂本寿一、練習生短刀を呑んで逼る」と新聞の大きな見出しで報道されたという。8月7日章は「汝、酒食の爲に、虚榮の爲に飛行家となりたるか。汝、飛行学校の名の下に詐欺を働ける盗賊、偽手形を書ける坂本、有為の青年の目的を奪ひ、尚慊らずして吾等のパンをも奪はんとする坂本」と糾弾し、「今や予は最早在校の望みなき也。よし断然袖を払って去らん、……咄、坂本!予は汝の肉を焼きて啖ひ、汝の骨を粉碎せずんば已まざるなり」と日記に記したと、『仙南村郷土誌』にあり、同じく先行する『秋田の先覚』にもある。『飛行詩人佐藤章』(アキラ会)の書中にあるのであろう。4年8月16日に退校する。

彼よりも少し遅く福井から入校した山縣豊太郎は、彼よりも早く見切りをつけて退校してしまったという。山縣は民間人として初めて宙返りに成功する。坂本からの納金返還訴訟も、500円の即金と残高証書とで示談で解決ということになり章は青山自動車運転講習会に入り1月程学んだ。

尾崎行雄(罌堂)の息子行輝と交友関係を得た。飛行機についても製作や分解などについて尾崎から学び親しんだという。5年(1916)帝国飛行協会第2期操縦技術練習生に、二十数名の志望者から後藤正雄と2人だけが合格し、所沢で合宿教習を受けることになる。因みに彼が絶交した坂本寿一は5年6月に中国に渡った。清王朝の後に権勢を握った袁世凱と対立する中国南方軍事勢力に、大佐待遇と300円で傭われたが敗れ、上海に学校を開こうとしたものの果たせなかったという。

翌6年(1917)2月所沢～駒沢往復の卒業飛行をした。卒業後協会の研究生となったが、5月25日の新潟県長岡市「三百年祭」の祝賀飛行者に、尾崎行輝と選ばれたのである。二人の祝賀飛行は好評で暫く県下に留まり飛行会を行ったという。8月には北陸連絡飛行も行った。人気の彼には糸魚川で後援会ができた。当時30代半ばながら糸魚川に閑居していた良寛の研究者でもあり歌人で自然主義の文学者相馬御風は、「貴下を讃美するは人間の力そのものを賛美するに外ならず」と書き贈ったという。一読したところでは「普遍的な人間力を讃えているのだ。君を讃えているわけではない」とも取ることができそうだが、これはやはり「君を讃美するのは、人間の高い力を具体的に君が示されたからだ」という意味なのであろう。そういえば御風も早稲田大学出身の新潟県人である。12月帝都訪問では記者も後部座席に乗せて2130mの高度記録を70馬力の旧式機で達成した。

7年(1918)4月1日僚友後藤正雄が東京-大阪間400kmの無着陸飛行に成功した。飛行協会の財政悪化の状況下に佐藤が発案の企画で、朝日新聞から受けた賞金1000円は協会の資金難脱出に大きく役立った由である。5月13日には彼自身が、四国一周飛行に挑戦成功したが、芸予要塞上空を飛んだ為、当時の軍事極秘の社会の中でスパイ容疑により憲兵隊の取り調べを受ける偶発事故も

生じた。帰京するまで2000kmの飛行をした上に、復路の岡山から東京までの5時間30分の速度記録からすると、大阪からの所要時間も後藤正雄の飛行を越えた速度新記録であったにもかかわらず、それ程人氣が湧かなかつたというが、軍事航空への気配りだったのであろう。

6月13日に彼は帝国飛行協会を辞職し、群馬県太田町の日本飛行機製作所に籍を移した。テストパイロットとして技倆を発揮することになる。その後飛行機製作所に設立された飛行学校で教官の職務も行った。試作機のテストパイロットとしては、当然ながら度々の事故に遭遇した。何度も墜落して、人事不省になったこともある。水田嘉藤太中尉が宙返り飛行をしたことに刺戟された彼も試み、成功する。8年(1919)6月に練習生の周防道喜への横転飛行の訓練中に機体の故障で墜落した事故は深刻であった。教官の彼は足の骨折で済んだが、周防練習生は生命を失ったのである。

3カ月あまり後の10月初めには、東京-大阪間郵便飛行が行われることが発表される。絶好のチャンスの前にして彼はあせつたに違いない。強い意欲が作用したものであろう。9月20日には全快飛行が行われるまでに漕ぎつけた。この飛行では周防練習生を悼む文章と、「久方の大空高く生享けて、いざ翔らばや光浴びつつ」の歌1首を書いたピラをまいた。彼を「飛行詩人」と称したのは東京日々新聞の小野賢一郎社会部長だというのが、漢詩に造詣が深かったと『仙南村郷土誌』にある父平治の素質を章はしっかり享けていたものであろう。印象的な和歌を然るべき場でよく詠んだ。

郵便飛行は、10月4日・5日予定されたが天候で20日に延期、負傷後の章には好都合であったろうが、更に22日・23日に延期され、飛行に参加の山縣豊太郎は米国製中古機、佐藤と水田中尉は中島機であったが、佐藤機は水田機よりも50馬力も劣る悪条件だった。だが往復を完翔したのは山県と章で、佐藤6時間59分山縣8時間28分優劣は明白であった。久邇総裁宮から賞金4000円、逓信省補助の特別手当1500円を授けられ、大正天皇から恩賜年金600円を賜った。さらに副賞の田中陸軍大臣からの日本刀1振以下、金牌・銀牌・写真機など二十数点の賞品を得た。少しく後日譚になる

が、佐藤・水田と共に「宙返り三羽鳥」と謳われた山縣は、9年8月25日宙返りの練習中に墜死してしまう。

大正8年10月17日彼は宿願の郷土訪問飛行を行うことにしていたが、上記の事情で延びていた。11月9・10両日それを実行する。飛行機は貨物列車で飯詰駅に着き六郷町明天地野に運ばれた。それより先に此处や秋田手形練兵場など検分した。前夜までの雨も止み風はあったが晴れわたった明天地野を9日朝9時離陸金沢西根村を一周し、高度600mで横手中学校上空で歓迎に応えた。横手上空から「秋田県民の常に変らざる同情と援助とに対し三千尺高空より遙に満腔の敬意を表す」と印刷した礼状を投下、角間川町を経て着陸。

午後再飛行六郷から大曲町・高梨村・千屋村を上空を1200mで飛び明天地野上空に戻り3度宙返りし十数万の観衆を歓喜させた。10日秋田市手形練兵場まで飛び、自ら「此の日の宙返りは極めて正確にやった」という1500m上空の宙返りをした。

大歓迎を受けた彼は、「新造機を持出す事も出来ず、止むなく老齡瀕死せん程の六号機にて飛行せる為、県民諸氏に対し充分の満足を与え得なかつたのを甚だ遺憾」と記し、熱烈に望んでいた新しい「伊藤恵美第19型章号」の製作を翌年末12月9日津田沼伊藤飛行機研究所に発注する契機を得た。その後長兄の弟助に計画と経費1万円の希望を書き送った。郷土飛行から帰り変化が生じた。日本飛行機の会社が、中島知久平と協力者西川清兵衛間の意見齟齬から中島飛行機になり、軍用機作りではテストも軍がやることから、9年(1920)6月30日佐藤章は退社する。さらに飛行学校設立計画案も仲間と意見が一致せず、結局飛行普及会の設立となり、曲芸飛行用の自家用機瑞典製120馬力エンジンの「章」号の発注になるのである。アキラはラテン語の鷲の意なので、要蔵が「章」を称したのは鳥人の意識を持ったからであろう。機の胴体には鷲の絵が描かれていた。10年1月普及会を設立する。4月中旬長野県屋代町を1万枚のピラと散布者を乗せて9時半離陸、冠着(嬢捨)山1300mからの嵐が烈しく長野上空まで迂回してから2400mまで上昇した。低空では地上生活の呼吸を感ずるが、高空は「一種の物さびしい静寂が

ある」と手記して山を越え、9時48分すぎ、松本市上空に出て宣伝を終えたが、着陸時機首突込み事故で予定のアルプス飛翔を継続できず、まめに記して来た日記も「桜咲く松本平低くみて浅間に酌みぬ夕陽が赤し」の一首で終わっているという。

章号で再度郷土訪問もしたが、10年(1921)11月九州～上海間飛行で賞金5万円の計画が発表され、章号は距離に適さないので「秋田号」製作をすることにした。名尾良辰知事を後援会長に、9月7日在京県人会・仙北会・仙北青年会・無名会などで1万7000円、秋田魁新報扱いが4000円などの募金があり、独乙製エンジン260馬力とも300馬力ともいう伊藤式恵美第24型秋田号が10月組立ての予定作業を進められた。伊藤研究所の都合で、11月2日仮組立となるが写真も写した。

10年11月3日、明治節の休日も、1月余前に一等飛行士免許を得た佐藤は、雄勝郡山田村出身武石新蔵助手と訓練。飛行中の章号が、午後2時30分津田沼上空で旋回降下をしている時、前年山縣豊太郎墜死現場の近くで墜落、29歳で世を去った。『仙南村郷土誌』の年表には「民間一等飛行士佐藤章、千葉県津田沼飛行場にて墜落死歿」と記されている。同時刻に飛行していた加藤正世は目撃していた。くに子夫人は郷里新潟に帰り数日前に男児を出産したばかりであった。主亡き秋田号は陸軍に寄附、残金500円を基に4500円で千秋公園に記念碑が大正13年(1924)建てられた。妻女と娘も参列した由である。朝倉文夫作の胸像には「一刹那その一時の悲しかり生死の境おもひみる」との自作歌が刻まれる。戦中回収もあったが、現在も公園内に位置を替えて蔵存している。

和崎ハル

金沢市に墓所があるので石川県出身かとも思った秋田最初の女性代議士和崎ハルは、まぎれもない秋田出身者で、明治18年(1885)2月1日秋田町榎山南新町下丁の士族栗谷信幸の3女に生まれた。明治初年の太政官制から初代総理大臣が伊藤博文の内閣制に変わるのが、この18年であり、秋田では翌19年4月30日にいわゆる「俵屋火事」があり、3474戸焼失204名焼死の災難の前年に当たる。ついでにいえば19年の年初に男鹿方面から入

った天然痘で、火事のあったころまでには3百数十人の死者があり、結局1760名罹患したというような苦難にも見舞われる時代の秋田に生まれた。栗谷家は土地も持っていて、小作米納入季には運んで来た人々に昼食を振舞うしきたりで、そこを狙って物乞いが来て小児の頭大の握り飯を貰うのも通例だったと資料に伝わるから、母親も情深い人だったと思われる。その家庭教育の影響もあったのか、小学生の段階から、恵まれない人々の子女の為に設立されていたキリスト教会の英和学校に、自ら進んで通学し幼くして教徒になった。

神経質で小説本を好んで度が過ぎ母親に注意されることもあったという。しかし彼女が数え年で11～12歳の頃に当たる日清戦争後の頃には父が来客と交わす政治談義に興味を示し聞き入ったというから、後年社会運動家になり政治家になる素質も備わっていたのであろう。27年(1894)8月1日の宣戦から28年4月17日の下関条約成立までの間が戦時であるが、29年には秋田に陸軍十七聯隊が仙台から移って来る状態の戦後であった。

明治34年(1901)9月秋田県立秋田高等女学校が開設され、隣県に遅れていた秋田の女子中等教育も軌道に乗ることになった。彼女はその一期生として入学する。37年(1904)2月10日日露戦争が勃発した年の春に高等女学校を卒業し上京、女子音楽学校に3年学んだ。この時期併せてアメリカ人経営のキリスト教関係の小学校にも勤務したという。そしてこの年に50歳で父親が世を去った。

明治40年(1907)卒業したら渡米も考えていたらしいが、電報で母に呼び戻され帰秋したという。母の勧めで習志野騎兵聯隊勤務の将校和崎豊之と結婚する。事典類などに明治44年結婚説もあるが年齢上当たらぬ。23歳で結婚したというので明治40年に当たる。夫は金沢出身の士族であった。新婚2ヶ月にして彼女は腸チフスに罹ってしまう。姉のタケ子が東京から馳けつけ看病3ヶ月で快癒することができたが、過労の姉が感染し亡くなる。ハルにとって生涯の痛恨事となってしまった。夫と姑と暮らし2男3女を得たが軍人の家計は決して豊かではなく、姑や夫の反対を押し切ってミシンを求め内職に精出したという。

欧州大戦後も、アジア世界はソビエトロシアの

成立もあって、大正7年にはいわゆるシベリア出兵など日本の軍事行動があった。大正9年(1920)尼港事件があった。そのような状況下夫豊之は樺太における3ヵ月の構築隊付勤務があつて帰隊したが、体調が思わしくなかつたようである。帰還後間もない部下数人を招いて御馳走したその夜、激しい腹痛に襲われた夫は、軍医学校でポリープと診断されたが、重症で実は癌であり病床に就くことになった。翌10年病状は一層進んだ。

胸に迫る文章が彼女の遺著という『私の歩んだ道』からの引用で『秋田の先覚4』にある。

結婚した時、私たちは堅い約束をした。「二人のうち一方が先に死んだら、必ず殉ずること」と。いま夫が日々衰弱して行く姿を見て、その約束を思い出さずにはいられなかつた。「あなたにもしものことがあつたら、私はどうしたらいいでしょうか、お約束通り私が自殺してお伴するのはわけないことですが、年老いた母上と五人の子どもの行先を考えると、私はお伴ができないと思います。……。六人を引き受けなければなりませんから私は残りますヨ」ときっぱり言い切つた。夫は眼を閉じていたが、やがて涙をながすのであつた。夕食に葡萄酒をだせというので、盃にみたましたものを、すすめられて私は夫と一口づつ飲み合つたのが、奇しくも夫婦一生の訣れの盃であつた。

というものである。

ところが同じ書中に「闘病五ヶ月、強烈な激痛にさいなまれたとき豊之は覚悟を決めたらしかつた。軍人らしく重態の軀をハルに支えられて床上に起きあがり、皇居を遥拝し、黙禱をささげて息が絶えた」という叙述もある。この情景と葡萄酒の盃を飲み合つたという場面とを考え合わせると、「殉ずる」という約束の破棄を宣言したのは、このような場面よりは相当先のことなのであらうと思われる。

何れにしても大正10年(1921)夫を失つた彼女のもとには女学校1年の長女輝子を頭に2男3女と66歳の姑とが残された。養う場は故郷しかなかつた。秋田に戻り県内では初めてという化粧・着付けの仕事をした。美容を選んだのは、東京で学生時代に西洋女性からマッサージを習つてお

り、按摩業も考えたが家庭生活上の時間配分が難しく、美顔マッサージの方を選んだのだという。

川反にも進出したが、洋風は花柳界の和風とはうまくマッチはしなかつた。化粧品販売までした。今の訪問販売で「門付して」売つたと当時風には表現される苦勞の業であつた。そして期せずして川反の職業女性たちと接する機会を持つことになる。彼女らの社会を知り自分の切実な現実に照しても、未亡人問題・母子家庭問題などに直面し、社会問題の課題に開眼することになる。社会運動家に進む彼女の歩みの前提が成立したのである。

11年(1922)早川かい主唱の「婦人矯風会秋田支部」の発会に参加する。修養会館建設運動、その寄附金募集活動に積極的に行動することになる。それのみか13年(1924)6月には芸妓学校を愛国婦人会支部長の岸本県知事夫人に働きかけて開校する。「のぞみ会」といい英語・習字・裁縫・講話など教えるもので、60余名の希望者が入学した。「醜業を是認するものだ」とする批判にも耐えて、12年間も女性達を支える類無きこの学校を継続した。

15年(1926)3月長女が秋田高女を卒業すると伴つて上京し、洋髪技術を学ぶ。3年後帰秋し洋風美容室を開く。実は苦難の3年の後に新洋髪学習に再上京して戻り、12年4月秋田初の美容師となつたとの説もあるが、長女卒業後が妥当なのであらう。10年に戻つて3年後は13年で、それから再上京して新技術を得て美容院を12年4月に開くというのは前後矛盾する。また「長男を東京高師へ送るとき、願書に添える騰本代に困」つて親戚知己三軒も回つてようやく寸借の目的を達した旨の記述もあるが、仮に長女と1歳違いであつたとしても長男の中学卒業高師進学は昭和3年(1928)あたりに当たる。新洋髪技術を身につけて戻り「門前市をなす」繁昌ふりと述べられる頃である。このような窮迫はあり得ない。高師進学よりは前の段階の様子の混伝ではあるまいか。

昭和2年(1927)11月長女輝子は伊藤永之介と結婚した。主人公の活動はいよいよ本格的になり、3年12月には秋田県会で廃娼建議案を通過させる。実際に全面廃止になるのは8年7月であるが、それは全国で4番目と早かつたという。翌4年3

月桃の節句に「秋田婦人聯盟」を立ち上げ、市会選挙浄化運動を展開し、5月の全国婦選大会に秋田代表で出席した。婦人参政権の必要性を秋田弁で叫び喝采を浴び、新聞漫画にまでなって広く注目を受けた。

5年(1930)に結成した婦選獲得同盟秋田支部は、7年(1932)4月に市川房枝・山高しげり等中央の運動家を招いて「東北婦選大会」を開催した。新聞の「女性身の上相談」にも情熱を燃やした。翌8年早川かいの廃娼のための秋田婦人ホームの発起人にも加わった。県内隈なく講演や啓蒙運動のために訪れ、鉱山や工場でも活躍した。軍国体制の進む中で遺族扶助料の悶着などにも人道的見地から誠実に対応した。

やがて日華事変勃発の昭和12年大阪で教師をしていた長男嘉之の意に従い16年間の秋田生活を終えた。転居して堺市の病院に郷土部隊の白衣の勇士が入院していることを知らされ、早速慰問に赴く。4年間も続いた。15年には85歳の姑の永遠の旅立ちも見送った。慰問で親しくなった孤児の傷兵が「名古屋に移住し母になって」と懇請するのを受けて、写真業の次男をも秋田から呼び寄せ名古屋で暮らすことにした。名古屋は亡夫の原隊の地でもあったという。2人も名古屋で妻帯し、家庭生活も安定し、陸軍病院入院中の郷土部隊将士の慰問も郷土秋田の新聞社の援助も受けて続いていた。国家政策によって19年3月次男共々名古屋から前年長女が疎開していた横手町に疎開する。

翌20年(1945)そこで終戦を迎えるのである。早速「新日本婦人同盟支部」の組織を結成し、当時として当然のことであるがもんぺとブック靴で婦人参政運動の県内遊説を始める。遂に秋田の歴史否日本の歴史でも画期的な民主政治上の転機が来る。昭和21年(1946)4月10日新日本の総選挙があり、たとえば2月12日大館の「かつら会」座談会を行っていたように全県で活動していた彼女は、10万247票の大得票で首位当選し、最初の当時「婦人代議士」と称せられた女性衆議院議員になったのである。

1度しか当選しなかったが、25年(1950)12月長男の許に移るまで活動を継続した。粉雪の朝に高官・財界人・のぞみ会など300人に見送られて

秋田駅を立ち秋田を離れる彼女は、体調も秀れず車窓にしがみついて震えていたという。26年11月18日金照寺山に『紀功碑』が建てられる。市川房枝により「秋田女性の母 和崎ハルさん」と揮毫されており、彼女は「母として精一杯やってきただけ」と感動的に語ったという。高い評価を受けてその評価に感激したのであろう。

翌27年(1952)12月30日大阪市阿倍野の長男宅で68年の生涯を閉じた。金沢市野山墓地に眠っている。夫の故郷であることに依るのであろう。

齋藤憲三

明治31年(1898)2月11日由利郡平沢町中町父宇一郎母ミネの3男に生まれる。父はこの年1月まで農商務省の林務官として東京に住んでいたから東京生まれである。32年10月祖父茂介が世を去ったので父は平沢に戻った。33年弟幸男が生まれた。長兄豊一は27年11月の、次兄寛次は30年1月の生まれであった。弟の誕生間もなく母は数え年29歳で肺結核に罹り、離れの室で暮らす身になった。弟は乳母の乳で育った。母に会うことも祖母時尾に厳しく止められていた。明治35年(1902)8月15日父宇一郎は衆議院議員に当選する。その当選証書が届いた翌々日、病床でも夫の選挙に気配りをしていたという母は、当選を確認して謹厳なクリスチャンとしての生涯を31歳で閉じた。

37年(1904)平沢小学校に入学。長兄は小学校上級生で秀才、次兄は2年生で体が弱かった。7月亡母と同じ佐賀県人の継母チエが迎えられた。伏見宮家に仕えた経歴の女性で、40年5月には妹敦子が生まれた。彼は強く、兄寛次がいじめられるのを弟の身で逆にかばった。6年生では先生に反発することがあり、同盟休校の拳に出た。もちろん彼は一方の指導者だったわけである。

43年(1910)卒業する。兄が進学している早稲田中学進学を予定期待していたらしいのに、父は彼の性格を考え選定したのであろう桃山中学に進学させた。大阪には叔父連次郎が住んでいたもので、大きな支えになったことは間違いがないし、大阪流の商売の実際や、関西的な生活意識を体験することになったことは、秋田で育った少年の人間の成長に大きな栄養になったと考えられる。なお体

の弱かった次兄は彼が中学に入ったこの年病没した。また大阪遊学中の45年(1912)6月25日に継母チエが死去した。チフスだったという。大正3年(1914)6月に父は酒田町から3番目の妻ときを迎える。翌4年(1915)早稲田大学予科に進学し、東京に学ぶことになる。7年(1918)には早稲田大学本科商学部に入學する。ここでは秋田出身の東海林太郎と親交を結び、生涯深い友情を持ち続ける。11年3月早大を卒業した彼は、5月に父から3000円を貰って平沢で林業・養鶏・養豚などの仕事を始める。農村の実態を見て、有畜農業こそ「救農」になるのだと考えるようになる。9年の総選挙で8度目の当選を果たしていた父宇一郎は、13年(1914)5月の選挙には出馬を辞退し、14年7月には平沢町長になる。彼の方も有畜農業の試みがうまく展開はしなかったようで、13年に産業組合中央金庫に就職した。

ところで父は14年(1925)11月初めから肺炎で臥床した。15年2月には幼時厳しく育ててくれた祖母時尾が88歳で世を去り、父も4月末治療のために上京東京大学病院内科に入院した。彼は敦子と共に附添っていた。5月10日社長をしていた横荘鉄道の資金調達の中で、父に代り安田銀行副頭取結城豊太郎に父の望みの申し入れをしていた。結城は、長く睡り続けている宇一郎が金利の条件など話す筈がないと疑念を示した。父は急に酷め正気になり話をしたのでその父の意を受けてやって来たことを彼は必死で述べた。

結城は「それは大変だ。御臨終が近いぞ。引き受けたから直ぐ帰りなさい。私の車を貸すから乗って帰るように」と急かした。若者は信ぜず大丈夫だと考え車の係に乗車を断り、百貨店で父の為に軽い羽根布団などを買い、いい気分で病院に着いた。そこは父が今はの際という場面であった。結局父は此の10日午後3時鉄道や県教育会のことの囁言をいいながら命消えた。結果結城は融資をしてくれなかった。はじめから重態の宇一郎に安心させるためのリップサービスをしたのかもしれない。翌年彼は平沢で分家する。昭和3年(1928)産業組合中央金庫を退職、東京府北多摩郡武蔵野町に新居を営み養鶏を行った。やはり救農精神によるのであろう。昭和5年33歳の時に、資料によ

っては「浪人中」と記されている弟の幸男と吉祥寺で500坪の借地を得て「アンゴラ兎興農社」を設立した。兎毛育成利用が目的であるから、7年(1932)には「東京アンゴラ兎毛株式会社」を創立する。社長は長野県の鷺沢与四二代議士で、自分は専務であった。アンゴラ兎は大正14年に浦賀町の志保井雷吉という人が初飼育したという。なお昭和6年1月には兄豊一が平沢町長在任中に死去した。

兎毛の利用とも関係し、鐘紡紡績株式会社の津田信吾社長の理解と支援があった。鐘紡は明治20年(1887)に隅田川鐘ヶ淵に紡績工場を建てた会社で22年に株式会社となった。津田社長は此の時代の強力有能な経営者であった。8年10月兎飼育場を神奈川県大和郡鶴間村の中央林間に移転し8000坪に拡張する。兎毛が静電気を帯びることで悩み、父の縁故から出入していた清瀬一郎弁護士の処で、東京工大出の長谷長次弁護士から同大の小泉勝永を紹介され指導を求めることになる。

小泉は東工大加藤与五郎教授の弟子で電気化学の専攻者である。即座に「グリセリンを吹き掛けよ」と教えてくれた。俗称リスリンともいわれるこのアルコールの効果に驚いた憲三は10年7月9日「電気化学を教えてくれ」と小泉にせがむことになる。一方4000羽も養う規模になっていた兎に、昭和9年寄生虫病が発生半分も駄目になるようなこともあり、彼の思いは兎から電気化学に移っていた。10年(1935)の梅雨の頃憲三は会社を退職した。鐘紡津田社長から次の仕事の「暗中模索費」として1000円の借金をし、飲食しながら1カ月も小泉の講義を受け、小泉のすすめでその師の加藤教授に会うことになった。

小柄な教授は、日本の工業について問う彼に、日本の工業はイミテーションでオリジナリティではないといい、自分が武井武助教授と発明したフェライトについて説明した。憲三はフェライトの特許権の譲渡を求める。教授も、すでにこの10年3月東工大を卒業した山崎貞一助手を担当研究者に当てて、「フェライト」生産を工業化しようと設立して、古河電工と独乙のシーメンス社の名から「フ」「シ」を採った「富士電機」が、都合で事を進められなかったので、憲三に譲った。中間

工業試験の為に10万円は必要なのに彼には2万円の金策がやっとであったが、10年12月7日「東京電気化学工業株式会社」を設立した。加藤教授への感謝を社名に表したのだという。芝の田村町に開いた事務所は間もなく丸の内の三菱仲三号館に移され、さらに同東七号館に移る。憲三の従弟齋藤隆一、東海林太郎の従弟蛭田信貞、女子職員の3名が社員であった。住居は東京市目黒区三田で、11年3月に持主カノ子と結婚する。

相変わらず生活は苦しく11年末に「鯛一尾」と書いた封筒を津田社長から貰うが、中身は5000円であった。その近くで金庫製造工場を経営する早稲田の同期生肥田茂夫から蒲田区萩中町に工場適地があるとの電話があり、約500坪を借り12年(1937)3月5日に鐘紡を止めた神戸の人素野福次郎が第1号社員として入った。早稲田を出たばかりの大歳寛も入社した。11日地鎮祭があり7月240坪の工場と80坪の事務所を建てた。そしてフェライトの科学者東京工大電気化学科助手山崎貞一の獲得に齋藤憲三は情熱を燃やすのである。

働き手の工具は、由利や雄勝で選抜の17~19歳の少年たち11名が、アンゴラ兎の飼育舎を建てたことのある中村喜代松に引率されて、7月3日「日の丸」の小旗を振る家族や友人に送られて羽後本荘駅を発ち、4日夕刻大歳寛が出迎える上野駅に着き駅前福竜館に一泊し、翌日タクシー分乗で都心を離れた羽田の「快明寮」に着いた。少年達の期待を裏切る老朽舎屋で「快日明窓」の語とはかけ離れた寮であった。13年6月山崎も遂に入社に応じた。第二・三陣の少年工たちも上京し、山崎の工具たちの指導も熱心の極みであった。

9月には秋田実業株式会社を創業し鳥海山の硫黄開発に当たるが、やはり津田鐘紡社長の後援があり、既に大日本興業・不二旭興業の会社も設立していた。14年(1938)1月11日には嗣子俊次郎が誕生する。15年10月東京電気化学工業の平沢分工場が実家の土蔵の1つを改造して開かれた。既に仁賀保地区には帝国石油、昭和石油などの名門企業があったので、この新参会社の人たちは「デンカ」とやや軽く呼ばれたという。

昭和16年(1941)12月に大戦が勃発したのち17年4月30日の衆議院選挙で初当選し、父のあとを

享けて政界にも進出した。翌年は議員調査団員として満州に出張もする。19年9月30日平沢町長になり、平沢町農業会長にも就任する。町長も父の任を享けているし農業会の仕事も父譲りの活動分野である。戦争は彼の上にも大きな禍を招いた。20年(1945)4月15日蒲田の本社工場が爆撃で全焼する。こうなると平沢工場の存在感が増す。

そして20年8月の終戦。12月1日志を同じくする人と共に議員を辞職。追って公職追放も受ける。21年3月には社長を山崎貞一に引継ぎ会長になった。山崎自身は交替は形式的で真の社長になったのは23年1月だと考えているという(『仰秀八十年山崎貞一人とその足跡』)。真実は、憲三が会社を護るべく社長を止めただけでなく、GHQの会社解体処置に対応するために自分の「持ち株」を全部従業員に分配したのであった。

戦中松根油採取で生じた木酢酸の処理が当時課題になっていたが、彼はそれを「酵素農法」に利用しようと努力した。また鰯をパイプで吸引する漁法など試みたが成功はしなかった。山崎たちがフェライト再興を熱望しても「副業で稼ぐ」という。彼の救農主義が敗戦で再生していたのかもしれない。勿論原子爆弾の威力から原子力の平和利用にも心を向けていた。この頃の平沢町長は弟幸男であった。22年9月GHQが、ラジオの方式を変える指示をしフェライトが不可欠なものとなり、山崎社長らの新しい方向で仕事を進めることになる。23年1月に憲三は新産業株式会社設立、彼が副業を引受けた。山崎社長自身は真のTDK社長になったと実感したらしい。10月から本格的にフェライト生産を始める。

昭和23年4月教員組合のストライキが行われ、平沢小学校に子供が通う父兄である彼は、ストライキする学校を拒否し、俊次郎を秋田師範学校の附属小学校に転校させ、借家を見つけ自分も秋田に転居してしまった。この秋田住いは彼の政治への意欲を再燃させたようである。協同党に入党する。追放も解除にもなり27年(1952)改進黨に属し、10月1日総選挙に立候補したが落選した。しかし28年4月19日の選挙で当選し一家上京した。息子も附属中学校から麴町中学校に転校した。

昭和30年(1955)2月7日の選挙に当選すると、

経済企画政務次官に就任する。長官は高橋達之助で、この年経済審議庁から経済企画庁に改変された庁の初代長官であった。彼は朝早く出勤し、局長たち幹部が遅刻出勤について川瀬利光総務部長に「皆、車も宛て行っているのに遅れて来るとは何事か」と注意を促した。川瀬は静岡高等学校で山崎社長の後輩だったので、山崎に「貴方の親父さんは役所の慣行に対し無理解で困る」旨訴えたという。31年5月19日科学技術政務次官になる。

新しい庁で各省庁が幹部のポスト占有争いをしたが、彼は事務次官に松前重義が推す篠原登工学博士を決め工学者次官採用の例を開き、佐々木義武を局長に選んだが、林野庁の古い建物を庁舎としたこの役所で「政務次官が…」という評判になったという便所掃除までしたという。

フェライトは32年(1957)NHKの受注でTDKは順調に伸び、34年には象潟に進出したように、由利・庄内に工場設備は展開する。憲三は35年(1960)11月の総選挙にも当選し、政界での実力を愈々備え、42年(1967)1月29日の総選挙では、41年12月29日に公認が決まった。31日帰郷した彼は、本荘市に置かれた選挙事務所で「公認料持ってきてくれましたか」の事務長の問いかけに、「山崎君が持ってきてくれるだろう」と言うほど、金に執着のない状態だったらしいが、兎に角当選して、5回目の衆議院議員となった。3月には自由民主党総務の重鎮として活躍する。

彼が科学技術庁で局長に選んだ佐々木義武は35年から衆議院議員になっていたが、9月には佐々木議員らと宇宙開発問題の視察で米国やソビエト連邦を旅したが、この頃から健康が次第にすぐれなくなる。昭和43年春の頃胃の重苦しい症状が顕著になった。山崎のすすめで9月19日東大病院に入院し24日手術を受け、結果良好であった。

44年1月見舞いにきた山崎は自分は会長になり素野福次郎を社長とする人事を報告し、2月発令された。彼も2月退院して稲毛の自宅マンションに帰った。5月には帰郷して軽い登山なども試みた。11月3日に勲二等瑞宝章を受けた。そして45年(1970)2月8日には、麴町中学校から日比谷高校、慶応大学工学部からイリノイ大学、そして慶応大学大学院と学んで東京電化研究所に入った

工学博士の俊次郎が結婚した。

2月中旬千葉市の放射線医学研究所附属病院に入院した。科学技術庁の付属機関でもあったが、大学紛争の東大病院を避けた趣もあった。重症であった。5月に退院したが6月29日にまた入院をする。8月7日にまた手術を受けたが、体調は回復せず、10月31日午前8時50分肝硬変で逝去した。数え年73歳従三位に叙され、11月13日青山葬儀場で東京電化の社葬が行われた。残した財産は最後に住んでいたマンションとTDKの株式2万株だけであったという。郷里でも11月17日午前10時西目農業高校仁賀保分校体育館で、TDKと仁賀保町合同葬が行われ、3000余人の会葬があった。平沢の竜雲寺の墓地に埋葬される。

昭和46年(1971)10月25日科学教育振興の財団法人斎藤憲三顕彰会が設立され、60年(1985)生家跡に青銅胸像も建てられた。銘板は科学立国唱道の同志政治家で時の中曽根首相の筆である。

小杉天外

六郷において後藤宙外、畠山眼外と共に『三外』として名高く、日本近代文学界でも有名な小杉天外は、慶応元年(1865)9月19日出羽国仙北郡六郷町(正規には六郷3村であるが概括してこう呼ばれた)に豊治・ソノの長男として生まれる。為蔵と命名された。

慶応4年(1868)戊辰ノ役には、絞油、醤油醸造、呉服・古着と広く商売を営む商人ながら、父豊治は地域の青年十数人と勤王有志隊に加わり官軍として行動した。豊治の母は辻勝兵衛の長女で麴屋・染物屋だった勝兵衛自身が橘千蔭門下の歌人国学者であったこともあり、豊治の伯父の辰之助は平田篤胤門の勤王家でこの戦役に初め19人の「有志隊」をつくったから、豊治も積極的に参加したのであろう。後に隊員は百余人になった。父豊治はこの時の働きを賞され明治天皇に拝謁を賜ったことを誇りにしていたという人柄であった。

為蔵も町の名教育者熊谷松陰に学んだという。松陰は平田門の国学者であった。漢学は岩屋順太郎に学んだといい、それは明治7年10歳の時からだとする資料もあるが、岩屋の秋田から六郷に移住開塾は明治12年なのでもっと年長になってから

だとする説（『六郷町史』文化編）もある。

松陰本名は直清で祖父直堅の弟直房が篤胤の弟子で、直清も21歳で平田に入門したといい、47歳で失明「北羽の塙保己一」と称された。根本通明の母もこの熊谷家の出で、熊谷氏は熊野神社の社家であった。為蔵は好学の地で好学の家に育つ。

明治16年(1883) 政治家を志し法律の勉強のため上京した。英吉利法律学校や国民英学会に学んだという（大塚豊子編「年譜」）。中央大学の前身である英吉利法律学校は明治18年(1885) 創立であり、国民英学会も22年(1889) に創立されたというから、伝えには混乱もあるが、数え年19での勉強上京であろう。

明治18年、21歳徴兵検査の年で帰郷する。18年6月23日「鶴鳴社」を組織そのメンバーになっているが、19年(1886) 4月3日それを改組した「学術研究会」の会費納入簿に16人の冒頭に為蔵の名があり、4・5月分の納入になっている。20年の名簿には名がないので在京に関係するものと考えられている（同上『町史』）。21年の頃「鳥峰倶楽部」という進歩的政治結社ができた秋田で、23年4月から5月にかけて、22年2月ごろ東京で知り合ったという後藤宙外と彼が、横手・大曲・角館・六郷と2人で弁士として参加活動していることが「巷議」第七号に記載されていて、彼らが国会開設時の政談活動を展開していたことがわかるから、名簿に名のない時期も長くは在郷せずに東京に戻ったらしい。

明治22年(1889) イーストレークの国民英学会に学び12月には東京専門学校予科に入学したと年譜にある。イーストレークは2歳で来日した知日外国人であるが、英・仏・独に学んで明治17年再来日し、さらに22年太田ナオミと結婚し、神田錦町に国民英学会を創立したという。漢字名は英名そのままの「東湖」を称し、日本英語界の重要人物であった。ところで早稲田大学の前身の東京専門学校は在学4カ月で23年3月に退学してしまう。政治から文学に彼の志望が変わったのである。

初めて上京した頃から為永春水や瀧沢馬琴の作品に興味を持っていたともいい、坪内逍遙の「小説神髓」を読んで文学で身を立てたいと決意したとも伝えられる。明治24年(1891) 自作を持って

逍遙に次ぐ大家とされた22年文壇登場の尾崎紅葉を訪ねたが、彼よりも2歳若い紅葉は評価してくれず、名声ある4歳年長で当年登場の作家森鷗外にも、「才能がないから他の道に進む方がよい」と全く顧みられなかった。そこで開化的な作風ではない斎藤緑雨の許を訪ねることになった。

緑雨は本名賢で慶応3年生まれ三重県が郷里だったが、当時本所緑町で父の家に住んでいた。筆名もその縁に由来するものであろう。文政12年(1829) 生まれの戯作者仮名垣魯文の弟子で、正直正太夫の筆名での毒説評論でも知られていた。27歳の遅い文壇登場と評されて自分より2歳年長の為蔵に「天外」の号を与え、24年の末頃には本所二葉町の長屋の1軒に弟子と自炊生活をする。李白の詩に「三山半落青天外」という句があるから「天外」を選んだのだという。従来為蔵の筆名は「草秀」であった。因みに魯文は27年(1894) 没であり、緑雨は37年(1904) 没である。

25年の1月、目の大きな痩せた緑雨と天外が机を並べて暮らしていたのを、後藤宙外が訪ねたことがあるという。2カ月で師弟の同居は解消した。伊藤整によれば、都会人で小うるさく皮肉でけちな見栄坊の師と、田舎人で粗大な弟子では一緒に暮らせなかったのだという。だが師弟関係は確かで、師の紹介で、後には「朝日」に吸収される「国会」という新聞に「改良若旦那」を発表し、25年11月文壇登場を果たし、同紙に12月も「当世志士伝」を発表し、翌26年1月から2月にかけても「狂菩薩」を連載したほか、2月に緑雨と合著の『反古袋』を春陽堂から刊行し、師は「売花翁」を、弟子は「酔骨録」「五つ紋」「哲學家」の3篇を収め、29歳で作家の地歩を先ず固め得た。

だが健康では27年(1894) 春に肺結核に罹かる。4・5月修善寺や興津で静養した。28年には4月20日から5月13日にかけて自らも出世作と称した「改良若殿」を「読売新聞」に連載した。貴族の若殿と取巻きを批判する諷刺作品である。9月に「時論日報」発刊されその社員になるが、間もなく廃刊退社となり、11月には帝国大学病院に入院した。紅葉の編で春陽堂から出た合作単行本『五調子』に「卒都婆記」を書くが、咯血のためにそれは未完の作品であった。

川上眉山・泉鏡花らの観念小説が評判で、樋口一葉も鴉外や緑雨に「たけくらべ」を絶賛されていた。彼は自分も誰ぞ名を借り有名になりたいと宙外に便する不遇感にさいなまれていた。だが、一葉は29年に若死し、鏡花は昭和14年まで生きたが、眉山は自然主義への考えに悩み明治41年39歳で自殺してしまう。長寿を完うしたのは天外である。「卒都婆記」は越後の地主が農民運動で財産を失い、上京して居酒屋で死ぬ主人公が、無一物なのに乞食を見ると施さずには居れない愚かな矛盾を、彼の言う「川柳趣味」で諷刺をしている。

明治29年(1896) 両親の許に帰り静養するが、この頃ゾラの作品に出会う。「ナナ」や「大地」を英訳本で読み惹かれたという。尤も彼自身は「ふと本郷の古本屋で『ナナ』を見附けたのです。三十一年のこと」と書いているが、それは昭和9年8月の「国語国文学」の記事なので、時を隔てた記憶違いや計算違いもあるかもしれない。仏作家エミール・ゾラは1840年生まれで1902年没なので明治29年・31年はまだ存命中のことに属する。

実験小説とも呼ばれるゾラの作風は、人のあり方を遺伝と環境から来るものとする写実主義である。もちろん子規の「写生」とは別だが、或る形の自然主義ともいえよう。天外のゾライズムが明治後期のこの時代の日本文壇で注目されたのも時代性の現われであろう。

明治30年(1897) 1月「白桔梗」を博文館の「文藝倶楽部」に発表、「かけ皿日記」を春陽堂の「新小説」に載せるなど活動したが、この2誌と共に島村抱月が《三大小説雑誌》と自讃する「新著月刊」という本を、4月に発刊する。丁西文社から島村抱月・後藤宙外・伊原青々園・水谷不倒らと出したもので、金主は宙外の従兄弟大曲の小西平洲(伝助)であった。創刊に編集者として参加し自分でも8月に「回想記」を発表した。

9月13日牛込の弁天町住旧金沢藩士の神官森川正義長女かうと結婚し、小石川区原町27に居住した。「かう」は「幸」とも書き明治12年12月20日生まれと年譜にあるが、10年生まれと『秋田の先覚』にはある。『六郷町史』にはまた「きくところによると天外夫人は多聞守といわれる士族の娘」と記されるし、『秋田の先覚』には「かうは

それまでの境遇はしあわせなものではなかったらしく、学校にも十分通うことができなかったという。天外との婚約期間中は天外と机を並べて勉強した。天外はその間、彼女にはふれることをつつしみ、ひたすら教育にあたった」と感銘深い叙述をしている。「内助の力が大きかった」とも書いている。32年には一人娘の文子が誕生した。

ところで好調の「新著月刊」は口絵に裸体画を載せたことが問題になり、好評だったのに15号で廃刊になってしまったが、彼は32年4月に『蛇いちご』を春陽堂から刊行し、その序文に「私の頭脳に革命の乱が起った」と述べて、従来の主観的諷刺から客観的写実へ方向を変えたことを宣言している。翌33年7月に「新小説」に「楊弓場の一時間」という、浅草の楊弓場(矢場)の筋もない実情描写の小説を発表、8月には文壇が注目した『はつ姿』を書く。原作では女工であるナナを清元の太夫お俊に置き替え、初舞台で人気が出て男たちの誘惑をうけるなど人の運命と社会悪を書き、「芸術の美の人を感じしむるや、宜しく自然の現象の人の官能に触るるが如くなるべし」と序文で書くゾライズムの小説を刊行する。『恋と恋』『にせ紫』の三部作に展開する。

35年(1902) 38歳の天外は1月に、代表作で北関東の地主の妻の遺伝と環境に左右される『はやり唄』を春陽堂から出した。前年春に病弱の妻と幼い娘を伴い、師緑雨の住む小田原に転居して構想を練っていた280枚の大作で、「小説また想界の自然である。善悪美醜の執に対しても、叙す可し、或は叙す可からずと羈絆せられる理窟は無い」と序の中で論じている。間違いなく田山花袋にも島崎藤村にも影響を与え、写実主義は文壇を動かす。この35年、紅葉が病のため「読売」への「金色夜叉」連載ができなくなり、評判の天外が後釜に選ばれた。伊勢生まれの山田美妙らと硯友社をつくり「我楽多文庫」で世を席卷していた紅葉と、緑雨はもちろん合わなかった。36年2月から読売に連載した「魔風恋風」は、紅葉の鳴沢宮を富山唯継に奪われた間寛一が高利貸になる話から替わったが、主人公の萩原初野と友人夏本芳江の許嫁である帝大法科学生夏本東吾の悲恋を題材として、モデル性が強く時代思潮を写す物語は読者の間に

大人気で、日刊新聞を再版させる程の大衆受けをし、天外は紅葉亡き後の流行作家第一人者となる。原稿用紙1枚が3円という破格の稿料だったという。反面ゾライズムの旗手が流行作家になり世俗化したことになったが、天外の開いた作品手法が小栗風葉・永井荷風の内面の真実追求の自然主義となり、漱石や国木田独歩も関心を持つところとなった。38年父豊治が68歳で亡くなるが、39年の藤村の『破戒』・40年の花袋の『蒲団』などに影響を与える文学史上の意義を担った。

40年(1907) 首相西園寺公望が代表的文士17名を招き「雨声会」を催す。もちろん彼は招かれ大正5年(1916)の第7回まで会は続く。41年文藝新聞社が、鴉外・露伴・広津柳浪らが勸進元の「文士番付」を作ると、彼は大関にランクされた。風葉・藤村・漱石らは前頭であった。思い半に過ぎるものがある。

41年に「読売」に「長者星」を9月10日から連載し、実業界と株式市場の内幕暴露をし社会を在りのまま写し42年8月8日で終わった。前編は42年1月に後編は43年6月に春陽堂から出版される。大正元年(1912)『伊豆の頼朝』上・下などの歴史小説も刊行し、2年「報知」に「落花帖」を連載した。このようにこの後も長編・短編・随筆を数多く発表するが、もう純文学の旗手性はなかった。

3年には「婦人世界」に連載の『銀笛』を4年実業之日本社から出版した。8年には10月4日から「報知」に「紅懺悔」を連載したが、この29日母ソノ76歳が病没するなど中絶した。12年(1913)10月9日文字が憲法学者高柳賢三と結婚した。14年母の七回忌法要を六郷の向いの家であり親交続く寺田氏を宿に行くように、郷里との結びつきも大切にしていた。昭和3年(1928)神奈川県三浦郡逗子町桜山の借家に住み、夏は軽井沢暮らしを10年頃まで続けた。6年(1931)頃から病がちになり、殆ど執筆はなく、読書や句作をし、碁を楽しんだ。六郷を訪ねると寺田家でも句作をした。住いの近い新感覚派の十一谷義三郎は基敵であったという。

昭和10年2月27日から鎌倉市雪ノ下41に新築した自宅に7月3日移転した。彼を貴族的だとする人物評があるという。美髯を貯え贅沢な服装や持

物、堂々たる邸・家族・使用人の丁重な出迎などからそう言われたのだと『秋田の先覚』にあり、また愛嬌もなく、自分を低くもせず、ひとに屈せずお世辞もなく、自ら高く止まっているような人だが厭味がない(中村武羅夫)とか、真面目・正直・勇気・無邪気で煩悶と反省とあり(近松秋江)とかいう評も寄せられる。要するに「秋田美男」だったのであろう。16年(1941)日・米英開戦の24日前鎌倉ペンクラブ主催の天外喜寿の会があった。

81歳で終戦を迎えた戦後の話題で忘れられぬことは、21年大佛次郎が中心の雑誌「苦楽」に、若い時の思い出でも書いてと求められ、「小説家だから小説を書く」と130枚の大作「くだん草紙」を22年4月の「苦楽」に発表したことだ。依頼した大佛次郎に「83歳の老翁が精魂を傾けて」の「大作であった。『苦楽』は俵せ」と記させた。

昭和23年(1948)5月に長女文字50歳を失ったが、8月31日芸術院会員に選ばれ9月28日宮中御陪食の栄に浴した。26年の心臓の重病は年末回復して翌27年8月7日に十一谷義三郎の思い出を「東京新聞」に書いた。「唐人お吉の作者」というこの文章が絶筆となる。9月1日88歳で長逝し、10月末建長寺墓地に葬られ、六郷町善証寺にも墓がある。

小場恒吉

明治11年(1878)1月25日秋田町亀ノ丁堀反町に新吾・イウの長男として誕生した。恒吉の父新吾は牛丸氏の出で、小場家に養子に入りやがて家の娘イウと結婚したのであった。明治10年1月新吾は上京し、11年3月戸山学校に入った。軍の学校であるが、そこで学んで身を立てようとしたのであろう。身籠っている妻を秋田においての上京であったが、5月23日入院して、兄に連れられ帰秋闘病生活をし、9月13日22歳で世を去る。

小場氏は久保田(秋田)藩主佐竹氏の一族である。新羅三郎義光4世の孫秀義の子義茂の子義久が常陸国那珂郡小場の庄(文和4年讓状では「那珂東郡小場県」と県などと書かれる)に住み小場の名字を称した。本家の太田城から西に当たる地なので佐竹西家と呼ばれる。佐竹義宣が秋田・山

北の6郡を領して出羽に移った際の小場義宗は、義宣の父義重の弟であり、兄に従って六郷に住んだ。義宗の子義成が大館城代として領内北方の鎮めとなった。義宗は兄の死後自分の長女に荒川宣忠という渋江政光の実弟を婿とした。政光は荒川弥五郎と称し本来下野国小山の荒川筑後守秀景の長子で渋江家に入ったのであるが、宣忠は次子であった。この宣忠が久保田小場氏の祖で広小路に居住した。6代処応の子義村が大館佐竹義方の嗣子となったので、横手城代戸村義連の8子峰房を迎え7代久保田小場氏としたが、処応に後庶子峰昌が誕生し彼が8代になり、峰房の長子昌光は宝暦元年(1751)分家し150石の分流初代となった。恒吉はこの久保田小場氏分流の6代に当たる。

明治18年(1885)4月「県立附属小学校入学」と履歴書にある(佐々木榮孝『日本紋様の研究に生涯を賭けた小場恒吉』)という。11年開校の秋田師範学校の附属であろう。或いは共学制から13年に独立した女子師範の附属の可能性の方が強いかもしれない。20年秋田で有名な狩野派絵師小室怡々斎秀俊の絵を手本に恵比須大黒を描いたと前掲佐々木『小場恒吉』の年譜にある。「十三歳になると、秋田で名高い画人であり、親戚にもあたる小室怡々斎の門に入り」(『秋田の先覚』4)との説もある。系図上高祖父の娘の子が怡々斎である。将来大紋様家になる美術少年第一歩の踏み出しである。

24年母は31歳で世を去る。義父は昭和13年84歳まで独身で暮らすことになる。26年(1893)4月県立尋常中学校に入学。「真齋」の号で絵に励む。他に竹城・樗堂・幽処などの画号があるという。31年(1898)3月21日中学校を卒業し、9月10日東京美術学校日本画科に入学する。10月にはもう日光方面に写生か描写かに旅している。30年3月に美術学校助教授になっていた寺崎広業も小室門下で久保田小室家本家とは親類であった。ただ広業は31年3月岡倉天心校長に同調美校を辞し日本美術院を結成しているのだから、34年9月広業が美校教授に復すまで、校内での小場に対する指導はなかったと思われる。

33年(1900)秋田の師怡々斎は69歳で逝去したが、恒吉自身は奈良で薬師寺の薬師如来座像のス

ケッチなどして、34年からは東大寺の法華堂諸仏像装飾紋様模写を始めた。35年8月には宇治平等院鳳凰堂南面扉絵「阿弥陀来迎図」の模写をしている。36年にも同堂装飾紋様模写をしている。

明治36年7月10日東京美術学校図案科建築装飾科を卒業した。日本画科から図案科に転科していたことになるが、これなど将来の生活設計について広業の「アドバイスがあったのかもしれない」と佐々木氏の前掲書は記す。確かに5年の在学は単科履習でストレート卒業の年数ではない。

37年10月29日茨城県立龍ヶ崎中学校教諭に就任した。県南の町は県北の小場ノ庄とは隔たるが、常陸国に持つルーツを意識した親近感があったのだろうか。38年には日露の戦で樺太に出征したという。特に記録した資料はないらしいが晩年の愛弟子山崎昭二郎の談が佐々木前掲書「年譜」に記される。39年4月1日に《従軍記章》を受けた記述もあるから従軍は真実である。それは輜重輸卒の記章だという。昭和初期には輜重特務兵という兵種に当たる。4月9日秋田県立秋田工業学校教諭となり郷里に赴任する。秋工の校章はこの時に彼が製作した。長く勤めず40年12月27日退職する。

実は母校東京美術学校の図案科助手に41年1月8日付で就任したのである。41年女人高野の室生寺で仏像光背装飾紋様の模写をしている。翌年には大分県国東郡の天台宗富貴寺の装飾紋様の仕事に関与している。昔の田染(しぶ)荘、現在の豊後高田市露の名刹である。また奈良の興福寺三重塔背堂装飾紋様模写、薬師寺東塔装飾紋様模写をし、43年醍醐寺五重塔装飾紋様模写をしている。

独擅場のこの模写は44年6月22日から8月9日まで奈良県南部当時の五条町の栄山寺八角堂の装飾紋様を模写した。養老3年(719)武智麻呂建立と伝えるこの藤原南家の氏寺は、初めは前山寺と称し、真言宗豊山派であるが政治的勢力関係では興福寺子院に位置づけられ、南朝の長慶天皇の行宮でもあった。8月11日から22日までは法隆寺百済観音光背、23日までは同寺玉虫厨子装飾紋様、8月28日から9月4日薬師寺四天王装飾紋様と次々に挑む。この頃篆刻を岡本義邦に師事し学ぶ。年末年始12月26日から翌年正月5日までは、伊東温泉で栄山寺の絵の仕上げをした。

大正元年(1912)に一つ転機が訪れる。9月2日から12月8日帰宅の日程で学術研究のため朝鮮に出張する。これが朝鮮古代紋様学の大家になる緒となる。そしてこの年9月12日に東京美術学校助教授になる。翌2年7月18日大久保鉄作市長の媒酌により同家で園部キヨ22歳と結婚した。彼は36歳である。大久保市長は明治39年8月5代秋田市長となり、大正元年に再選されていたが、親戚で鉄作の母親は恒吉の母イウの叔母に当たる。昔の研究者としては珍しくないことであるが、新婚のこの時も8月から朝鮮に60日間出張し、古墳の壁画紋様を模写する。

3年(1914)4月1日長男 晴夫が生まれた。幼時慈しみ育ててくれた祖母カネはこの曾孫の誕生を殊のほか喜んだという。彼が14歳で母が西明寺村で死去した(佐々木書「年譜」)のだから義父と暮らす彼に血の繋がった祖母は実質母親だった筈である。ところがその祖母は6月24日76歳で巢鴨宮下で世を去った。だが曾祖母に喜んで迎えられ期待された晴夫はその愛に応えた。長じて浦和高等学校から東大に進学工学部を卒業し、大蔵省から建設省に勤務し建設省営繕局長の要職に就く。そしてこの年も彼は妻子を残し9月から11月末まで朝鮮に出張した。思えばそれは当然の職務であった。

4年には前年からの企画で彼自身も建設委員会の幹事であった佐竹義堯銅像建立の台座設計で、担当として8月19日工事監督に帰秋した。10月17日に除幕式があり、東京美術学校津田信夫助教授が正木直彦校長の代理として出席した。

大正5年8月15日美術学校を退官した。この年開設の朝鮮総督府博物館嘱託に就任する為である。京城府西小門町に居住する。6年3月26日次男豊次が生まれた。7年(1918)10月21日の夜間である。15日から全羅南道羅州附近に出張調査中の彼の許に妻急病の電報が届いた。直ぐ帰途に就き22日9時半に帰宅したが、5日後の27日教員として若き日の家計を助けてくれた27歳の夫人は、この時5歳と2歳の男児を残して帰らぬ人となってしまった。劇しい悲しみに(自分が墓あばきなどしているからだ)と、職務の考古学的調査について悔痕したともいう。

9年8月26日大曲出身石井トヨ32歳と結婚し、10月30日長女が生まれた。祖母と同じカネと命名する。恒吉の祖母に対する念いの深さが知られる。長女カネに関しもう一つ大きな事実が生起する。13年カネが5歳で夭折した。その翌年2月14日「京城黄金町三ノ三〇二番寓居六代小場恒吉」と署名して、『源姓小場家系図』を編んだのがそれで、そこでは「昨秋十一月一日愛児カネ子ヲ喪フテ哀愁禁セス、意気消沈蟄居楽シマス、會マ筐底ノ古帳ヲ閲シテ家系ヲ得テ、茲ニ改メテ記スル事トセリ」と述べて系図を整修したことを佐々木は紹介している。朝鮮では家系譜を極めて大切にしている。そういう雰囲気も刺戟になっているのかもしれないが、愛嬢を失った哀しみが後世にこの史料を残してくれる動機だったわけである。

14年6月5日美術学校講師として工芸史を担当することになり、11月上旬東京府北豊島郡西巢鴨町大字池袋327に転居した。昭和2年(1927)11月9日三男友雄が生まれる。3年には秋田市紋章矢留の図案を制作し6月8日制定された。9年11月中野区江古田三丁目に転居する。10年満州国通化省輯安县高句麗古墳・古城調査に参加する。現在中国吉林省集安县で、昭和59年戦後初の日本人研究者の好太王碑を中心の集安探訪に加わった筆者には印象深い話題である。これから従来の朝鮮に加え満州にも及ぶ研究が一層の展開を見せる。

昭和17年(1942)美術学校勤務25年の感謝状を受け、翌18年高句麗古墳壁画研究で「西日本新聞社文化賞」を受け、終戦直前の20年(1945)5月8日京城や平壤に出張し高句麗遺跡調査に当たり8月1日帰京した。あの終戦の2週間前のことである。21年12月24日美術学校教授に昇任、工芸科長となった。そして学制改革によって24年東京芸術大学が誕生し、6月その教授となった。

25年(1950)5月29日「日本紋様の研究」に関する多年の業績によって、第一回日本芸術院恩賜賞の榮譽に輝く。帰宅を待構えていた取材の新聞記者が引揚げるまで近所を巡って時を稼いで玄関に入ったが、1社(朝日と認められる)だけが様子を見ていて引返しインタビューをした。フラッシュを浴びせられ「他人の家に来て勝手に写真を撮るとは何だ」と怒ったという。宮中御陪食の

席でさえ、昭和天皇の「小場はヲバかコバか」との御下問に「男なんですが、皆さん小母さん小母さんと呼びますからヲバでしょう」と奉答し、天皇も笑われたという超人ぶりを、『秋田の先覚』に後輩の芸術家長瀬直諒は書いている。

27年2月18日大学の評議員になり、3月末退官以後一層鳳凰堂紋様復元など以下を精力的に行う。佐竹義堯公銅像再建に関わり、28年8月14日除幕となる。30年(1960)文化の日に紫綬褒章を受けるが、前掲の『秋田の先覚』には「迷惑そうな顔で、表彰状を眺めてつぶやいた『ここに描いてある模様はなんて下手なんだ。第一、この総理大臣の印はなんだ。一国の宰相の印にしてはひどすぎる』彼は篆刻でも一流の腕があり幽処と号した」と記され、続けて「さっそく根本竜太郎官房長官に注意の手紙をさしだした。すると、すぐに長文の詫びの手紙が返ってきた」とある。根本長

官書翰は12月9日付である。

現在の記憶では年月は定かでないが、この頃の秋口に宇治平等院で老大家が仕事をされるのを見かけたことがある。大家が秋田出身であることも未だ知らなかった筈の若輩は異様なまでに没入しておられるのを望見したのみであった。精力的な模写で眼を悪くし、夫人と共に買物の帰途躓いたのが原因で健康を損ねた、当時の表現で〈脳軟化症〉になったという。

昭和33年(1958)5月29日自宅で逝去する。81歳であった。遺言で僧も呼ばぬ葬儀には、自筆の「平等院鳳凰堂扉絵」の「来迎図」一幅が掛けられた由である。老壯思想に徹した人らしい心をうつ話である。それでも大居士号は法隆寺佐伯管長から受けており、墓所は郷里の安養山光明寺にある。トヨ夫人は翌34年に71歳で世を去った。